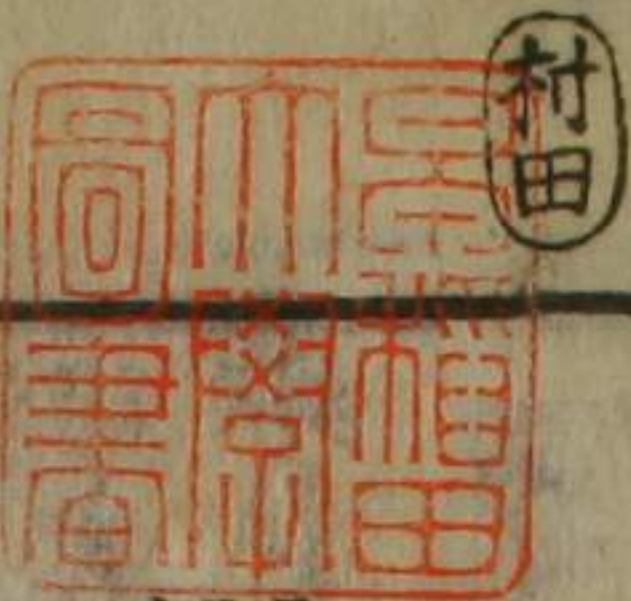




積善之家有餘慶  
積惡之家有餘殃  
松谷園人題

朝夷巡嶋記全傳第六編卷之二

東都 曲亭主人編輯



後輯第五十一

法蓮の粉餅配  
陰徳の倒應報

再題越中國婦眉郡岩神の郷より船向判五宿所へ朝夷三郎義秀が  
曩も義邦并平太の佐方を索求して加賀の小松の郷よりあるを立寄るに二三  
別より二とせのまりあり来るを今發する陸奥の戦のこの地は今義秀が  
今彼処あり義邦夫婦を拯ひ出で經任を討捕する軍の勝負云々風聞  
大々さうざれはさて彼人義を結ひる友達の為本意を遂る大將副將并伴  
れ直小謙倉へ参るとの近日は音信なくむと云ふなりこの地は今亦忠諫の  
るはあつても人かやあつてあるは家内の人みる日くは噂をきくは千歳と

1278  
27

歴々たる憑りしも甲斐なる苦樂哀懼聚散離合常なる現夢の世の夢と  
 思ふと覺ぬ迷ひを果しける時建仁三年六月七日日判五宿所志  
 佛夏ありあつて響小菩提所地蔵尊寺へあるとて出あふむき還るも三宿宿  
 在る後廣光妻淺良井と根々整平奴婢あり火焼水汲里配の餅搗く音聞  
 る上を下と渡取の如きも堪へた夏の日消し立升る甕の湯氣玉の汗かき  
 ぐた臺所此の傍よりちちと配ま出せとて盡ぬ敷くむとて餅も暑れ日  
 影も片より未の刻過ふけり結外に柏向判五の年尚う旅客の望果なるを  
 伴う菅笠引提ぬる妻の頻り小言ある杵の音電門より観望をきき餅搗  
 終るも土旺前とてこのけ暑熱も一は堪へたさききとて勞を淺良井  
 とやくづけり母屋の簾戸をのぞく推ひて出迎へ只今還らせぬ秋宿  
 なるもこのはしき一里ある路の程さるの疲労れぬけぬやと中達洗足の湯を

環會より元晴大人の實義親切笛姫のあきと巨細のききとて朝淺  
 事さるの比まきあるよりをうち歎ける友鶴がといひけて湯うちかきこも血  
 るに總言する信夫の没落尉者の厄難さえ比ひてさう勅分のさう春さる  
 長雨に色をえさる一福還る福とあり此度の勝軍を身もの五層ものと  
 一はさるる切て弥生の比まきこの風声のききと悔したるさるのひの歎息さ  
 けるゆゑ思ひを淺良井が浅く汲ぬ憾のさる理のさるものひの慰難に共  
 歎息の外さるけりこの時まき彼旅客の縁類は尻をうけて頭を垂れを文に彼の  
 同さるさるさるを淺良井がさるさるさるの何れの使を誰とて次で  
 みるのさる候せぬさるのさる判五の微笑さる不使ぬさるさる宝珠山さるさる  
 見過るさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる  
 より平野のさる出左衛門新幾田の溝整橋を渡る折にさるの社伎か石を扶け



うける當下浅良井ハ豫ク用意の白米一金元祐錢三文をりて出で  
取らば尼ハ項ハ掛り頭陀囊の口を振て受納め外面兩二世退於母  
屋に向ひ鉦うち鳴り只今志の精靈菩提の爲願以此功德平等利益施  
一切發菩提心應頂礼南無阿弥陀佛南無阿弥陀仏と我遍々繰返る廻向  
とも鉦うちて徐々ともゆるゆると程判五のゆるゆる聲中平次ゆきこの  
邊で二つもえこのりとも是れ廻國のそあんとするもの果報の儀  
ゆ似はるくも抖擻行脚を旨とて獨行を志する人れ今宵の宿か  
志を佛更の法延續経の菩提所より今朝を執行しなむ願ふ所を  
駐めたる所廻向とゆるゆる非時の鐘を鳴進まうけけと他更も請れ  
一議ふ及ばず是推察せらるる靈場靈地を拜ふ八州四國九州  
こゝろ巡り程々年来を歴されとも北國のゆるゆる素よりわが旅ゆく

平次



草太郎を  
救う判五  
行脚の尼と  
むは





立驛たちえきの聲こゑの定さだく不ふ呼よむふ呼よ門かどにも應こたへをせむ困こまど七しち四し下げをえく庭にわ門かどの案あん  
内うち知しるこゝれこゝれ四よ五ご十じゅう介けの金かね撮と棒ぼうをの輕かろき引ひ提ひく進しん入りる前まへ面めんをれを一個いっぺの  
賓ひん書しよ院えんをり從したが者ものの縁えん頼らん居ゐるれ湯ゆを飲のみ果は子こをら咬くはふ傷やう若も無な人ひとの形かたち勢せい  
る小こ判はん五ごの怕お慎しんと膝ひざ行ゆき頭かぶ首くびをりけるの縛くわのる体ていあるるあるるひひるる其そのの  
来き由よしをえく揚よう樞しゆ芳ほう宜ぎを編へ中ちゆうへる匾へん色しきの蔭かげを躲くひひく且かつく容よう子しを窺のぞひひなり  
當下たうげ速すみ景けい容ようを更あらめをれ判はん五ごと喝かくれ應こたへ膝ひざを進しんを信しんと疾しやく視しを声こゑを仰あり立た  
朝あ敵てき經けい任にん亡むしびるれもその殘ざん黨たう離り散さんと富ふ國こくのわりわりりも命いのちを小こ汝にょ膽たん太たくも暴はう表ひょう  
小こ經けい任にん荷か膽たんく竊せうの彼かの地ちの產さん物ぶつををり受うく賣ばい買ばい經けい任にん伏ふく誅しゆこれをもる同どう  
微ゐりもるる彼かの殘ざん黨たう高かうの耽たん忠しゆう二にの小こ賊ざくとるる舍しや藏ざうをりり訴そ人にんありる  
露ろ頭とうぞりこれより耽たん忠しゆう二に判はん五ごを捕とらるると仰ありる戸こ樞しゆ殿でんの元もと下げ知しる今けの  
追お路ろもるる彼かの殘ざん賊ざくを推おししてて身みも共とも縛くわををり受うくと罵ののれれ殺ころ平へいハ十じゅう

中某実ハ耽忠ニ經任滅亡より身の措けざる不當國ニ逃れずの稻向  
判五ハこの年来經任一味ののれ由を告多を寓く舎藏までをひひりと  
いふ判五ハ膽を洗つて必しも仰さるゝ輾とせしむを突立膝組直眼を睜り  
この癖者奴何をいふこれハ汝が素性をあらわす又彼入水の趣を必しといふも何物  
とせんとておとたる恩は肩に誣言ハ過世の讐歟現世の歎歟と憎腹た  
いふまに敦固でも耽忠ニ騷ぐ気色も百田の阿爺よりまじはる聲で覺れて  
術も一勅は諄々苛に呵責あるより經任一味の舊縁あれ舎藏よりと  
まふやといふと判五ハ怒は勝ど又ても癖者奴が偽言も支ひぞうん然るあは  
ひもせざるにふとめを助けるを命ふあはれども誣言歟必やと罵りつゝ衝  
よく攘著んとくけを夥率亦透さる推隔て判五を礮と打退け犯人の首  
伏しつゝその罪を追れんとて淨以仍大膽不敵汝をも亦縛めく打懲さる

夏果ト覚期をせよと罵りて索を被んと立よりを速景と急小推禁めやれ  
判五と叫立て傷を招き声を潜し駝忠三既小首伏きこれ陳トりとも罪ハ  
追れどかれバ駝忠三のろ共よその身へさる妻子女眷属悉皆搦捕て戸松殿へ  
牽りて来りんこれハ号ひ職役の當は終るにころりあられも稲向氏の當郡  
一の舊家ゆゑ鎌倉殿も知召れせむ相續の庄官るゝまゝ只賣得の利  
惑て經任一味の風声ゆりとも渠小與々反逆の言を齊するよりいひえむさ  
とても駝忠三を舍藏する罪輕かぬをりつゝ役義小離まての彼癖者  
路次小繼りて和殿が陳さるよりを取らるのその妻女奴すゝ連係の坐を逃  
れん漢土の常言ゆ千金の子ハ市に死るべとのふとあるを必ひぎやされ古歌ゆ  
山吹の花色ころものぬや誰とど答もくちるふあゝ彼駝忠三の結果る  
問へど答も死人ふちるゝあま方便ハ山吹の色をいふまほりのるゝあま

ともおん盆を勧んとおりの田舎の魚料理締果敢ておのその間におん疑ひの  
まらありとてあるト判五の不慮の厄難さうこそ犯せる罪なるぬは只の癖者馳忠  
とておん片言のまじり召れおのそのむねを護ひのあさきおのそのおのそのおのその  
問を願ひはるゑの薄ゆるれども當坐の進物目録に載て用意せり御受納の  
一家の幸ひとておのその懐よりおのその目録を恭しく差よはるゑ速景画と和げ  
原來御邊の出納の財布尾を穿る老僕代の一三とておのその趣忠より義にこれ  
とて今袖の下る贈りの受くるるれども長途を勞ふ為め饗膳代といつてこれ  
おのその推辭の人情をばるゑぬのよ似るべ定めし心を用ひれる包の数も三つある  
内見とておのそのおのその披く一通の目録なるぬ經任の四天王と呼まれる鐵盾  
矢藤五重連が骨相書めくおのそのけきおのその是れとて速景のものを繪圖とて  
落とて周章とてと一六隠持たる一口の短刀を横佩詰とて後なるるる賊將

速景を看  
破しく一三  
厄を釋く



矢藤五郎の経任を乞ひしより、汝は脱れ、絶て往方の事を言ふなと骨相書を  
 りこの地まで拘縛し、索する天羅の中ありき。虎狼の野心を改め、戸極殿の  
 御内人十渡蹄馬遠景と偽り名告ぐ同類を相従へる一人、越後越後客平太郎  
 との假名さして入水、入水とせ入龍せられ、煉鳥のあつたを欺り、ひひひとく  
 許すの金を就奪んと巧し、この不敵さ、汝が本つ初より主従の物公なる北國の  
 人は似て且穿鑿とせよとせ、三千金の賄賂を貪りんとせ、為体のたれども骨  
 ねがももむつとあり、戸極殿より拘縛れる骨相書をうち披いて物の  
 蔭より合とせよと眼上黒子あり、額の外は金瘡の跡あるまで一点違ひ、原来  
 鐵盾矢藤五郎と既に見極め、けいふの難義の救ふ易しとせ、さうさうも  
 彼れより時宜をもち、伎倆の裏をかく見顯し、さうさうも捕まの用意あり。  
 あつた數代の庄官や、帶刀さへ許され、小騙略のあつた苗字の瑕瑾も、他

郷の浮浪人生れ、百姓でもせよ、野夫や功の者逃ると、脱と一個、  
 実の名を告ぐと、推並ひ索され、老人の皮を攪る鏡の振勢、判共  
 夢の覚るごとく驚き、後方措ける中力、さうさうも撿取く先惚るも、二の振勢を  
 資とて話とせ、騙竊殺計の悪根、ホの事の露頭、あつた怯と、逃足を踏む  
 その中矢藤五郎の顔の色、赭くろり又蒼くるまで、呪詛する、遠恨の暗光を、又たて  
 立る、何れも雲時、心もせよ、けいふ、これでも不敵の癖者、それいふ、さうさうも、  
 あつた、左右をえり、通一三好眼力、知られ、名告る、あつた、景、  
 うきりて、獨立の思ひを起し、今茲三月の下、濟平、泉を立退く、時、  
 中この重連を、汝が、搦捕を、聞く、龍の腮、骨く珠を、蛙の、寛、  
 又、是れ、力で、勝んと、財庫へ、案内を、あつた、限り、と、遁、  
 塵、中、里の、雛、狗を、肥、と、れ、覺、期、と、せ、と、罵、り、て、刀の、朝、と、せ、と、  
 一、二

透さど衝と寄やう臂を禁め力を抜き入る出よと鳴る先次同集合  
る根々並平真先その他僮僕在客何の程ふ二三暗跡を俟たる用  
意の器械桿棒連枷引提隔亮の蔭より羣と走り出撃んと競るめく  
しと矢藤五が挑と戦ふ力の稍衰るめ怯せし悪棍も矢藤五小気を引られ  
衆皆力を抜れと吐と嘔と鬼向との隙は脱忠二の尻も結ぶ施計の縛の索  
引解と跳越二箇の小厨の合する桿棒奪取り懸計の悪棍も共嘯叫で  
矢藤五を援けと頻り戦ふれぬ暇あるものなり一二のあつ判五を背負うと  
声を奨め賊徒の幾も六人なる小輪あくと鳴れども武備疎れ在客角組む  
並平根々も殺立れと幾と退く透をぬると矢藤五の奥庫索とあつ  
この障子紙門を蹴とちる勢ひや四下を拂て柱のめりけりこのとれ  
もでも義秀の離色の蔭は窺をり既ふと在客亦足ると取次殺立る  
もとるるべくもなされ義秀今ハ怵るて書院の庭よりあつて天罰知ぬ残  
賊共白昼の引剥と在客亦屠らるる女頭の用心は神明仏院の目も先  
むとも朝夷三郎が嚮よりあつとあつと其仇を退と罵る声は迅雷異る  
む身へる飛鳥の影より速く閃と登る縁頼より金棍棒を取延て右も左も設  
仆せ逃んとする悪棍兩人肩尖頭顱を砕れ苦ともいふ死んけり残る  
三箇の悪棍はひひける義秀が名告る駭き本事も怕れし抑天より  
降る歟又口地より涌る歟と罵り騒げと活路を索る暇あり一ハ已てを  
ゆむ力を勤と殺脱んとしけるを義秀ゆむと引つけ先に進し脱忠心  
捍棒幾矢と打折怯むを透さど左も右も廻りて投著れば後も  
進む兩人の象棋倒しと撃倒され三人齊一蠢蠢と起んとするを起しも  
透さどのがつと礮と撃鬼神不測の力量剽技貴子の下折る



こゝれ既小矢藤五絶つむり泣く嬰児を揺揺質捕く鯨張立る縁  
頼り拷り負る声きぬり立朝夷且く其処は苗れ汝萬夫の勇ありとも近つゝ  
この小児を屠らんとも進む敷くとも飲めみくと呼れは義秀方うらんで冷笑ひ  
無慙る殘賊奴が追詰られく苦し隨ふ敷くも足るぬ小児を奪て保質ふ  
あつともこれぬめは汝を免え觀念せよと罵りくとも近つらんとも程頻りよ  
うち泣く孫のまゝ身の危をも忘れる判五二三のろ共は慌惑ひきまりあや  
朝夷ぬ等々あの嬰児の去成の秋友鶴が産りくあや初子なるものを  
暴立てり殺されぬ後悔其処立くつ初より孫を返せとるが追ぎぬ  
ぬぐと勸解の袂より携ふ二三も亦推禁めて阿三殿の早りのる百田の  
ぬぐと月三憂おもひるえ負ふ慈も初孫は怪我もあふ共侶小玉緒も絶  
ぬひる人すつ退けく後よそ尋思もあめと諫るを義秀聴ど頭より掉り迷  
へる公羽達義秀ありと木石をわづらふを憎くともあつと重連の賊の  
殘黨大辟不赦の罪人されば官府よりくも拘知されて擧捕れよと知  
されぬ口因に愛ふ羈されて阿容くことと這奴を返さ今さら何を後義やと  
後日の咎とのひ解るぞ加之義秀も愛ふ溺れて逆賊をの敷きぬと世の  
人ふうろ指をされぬ墨の衣ふ姿をえく人の口は立死の誰又武文勇士  
とのんやかむの理義も暗なる言あふの惑ひに禁るゆ飲と敦圀ども  
判五のめ携りて放さむと口おすのひのつとあふるて見ふ老へ便り  
まゐるは只あの初孫ひとりをもて母の殊醫の花とあて憂を慰めくあや  
冠ふ擒とせられて死をすむるの大厄難を救ふ外ふれぬと死心されぬ  
一二も亦言葉盡し頻り凍めく己ざりて矢藤五遙より雪て兒の計の  
如く天さる口を因にくうら笑ひ朝夷でも紙雛でも立きぬみよるまふ

そこの諄言は、あまのこど有敷の判五善了簡さすて孫の欲く三箱の  
金をとて出せ三千兩を賣せり。氣さく目前で卷の引導この世の  
暇取さふ救活さふ救生死さるる金との商量美の道多く返答せたりと弱目の  
債不敵の廣言声位個と嬰兒を今を打んと取るは吐嗟と騒ぐ一二より  
判五の堪む声より絞るくやも等矢藤五望を任せ喃朝夷ぬ千々の黄金の  
入道の命かづるをさるるのいやをの糸の乎し理と下は王の天衣立金と受

明夷六編卷二







閑ぬや世の春をうらふ宿の秋の寤寐の心地と夜の目もあると老夫婦が  
看病勤りのやうな心づき憂苦勞のでも察しあうかて春過た夏へ  
あつた死天の田長をうらふ鳥の声やうらふも氣あかる比も四月十八日鮮明の月  
も西ふ没るを曉の友鶴へと後のひるを俯向膝は涙の雨と降そぐを拭拭ひ  
鼻うちかきその曉の友鶴の睡るがごとく息絶りその先の宵はあやうの田鶴嬢  
久後そそれとわかれのひ送る年波も稍よせあひむ二をうらふのむくの  
孝のめ盡さむ去歳より殊ふ人あふぬ物をうせなうそを慰むよりもう  
後の歎れを置土産は逝てうらぬ別路とさうせんよの悲しうとこのれ言  
葉の耳ふ送り目ふるはえある面影のうら子をさるあふねども田舎は稀る美  
目風俗のたゆみ織績ぐ女子のうら拷余新羅の琴も今様のうらひ抱え  
妙なりたうとく浮るうらひ親を慕ひ夫をうら心操を縹致さ入並ふ  
勝れても可憐の長うら年老る親のうら子を送る死天の旅  
枕廻向も逆縁は出さ極まり携りる老妻が歎れも夢の夢友鶴が初七日の  
墓とありのうらうら妻の平中うら倒れ終は抱えぬのうら病と絶ふ七日ふ  
あ針灸茶餌の驗もる五月二日は又うらうらうらうら月の憂苦心勞蘊  
積て氣を塞だ心神裏は衰果て救ひぬえまされる老る婦人のうらうらと  
醫師のあやうけ某既ふ六十ふ近う暮るえとる齡りて四月五月とうら  
續く只十四日の程めく女児を喪ひ妻ふ後れて残る孫の田鶴嬢の心地煩  
あふ目も渠をえれ病瘥り抱えぬたふも渠を抱け秋を忘れぬのうら  
と慰めを又只のうらと強次ぬのうら撫れをうら救ふ擲殺さうと天  
命るうら哀れのうらとこのうら非情ふ似る殊更けの友鶴が四十九日の  
餅配り又亡妻の五七の追薦地藏尊寺へ布施齋しく法經讀經の

朝廻向久さる人の命を助け陰徳をうんとせむも鄙語よの鵲の啄みる  
齟齬や禍とるゝ危窮を救れども孫を殺して何かせん。いともある友鶴  
わんが妻まれ側室まれ初を推せ恩義あるわんが父母の子あるもや福  
祿の中より養ひ取る吾侪の義理ありとも。一トする妹使のわんが  
さればとあれ友鶴がわんがを恋も慕ひひの實の親も孝へ負りその故  
むも戒名と妙孝至貞とつけられ自然の稱名詮自性かくまの鳴呼  
るゝて釈迦は法問孔子は講書あは笑つた。とるがわんがの鬱や  
矇やをわんがの縁久ゝ返ともわんがの絶や人の玉緒をわんがの  
ゆゑ形なる猛なわんがの心をうつよ。と憾のむく愚痴は疑りる老  
人の涕は鼻をつませ。歎の果ゝまりけり。理の通る哀傷悲泣を奴婢  
ホのんづゝはなざりけん。わんがの退れを二三の側よりせよ。と毎々嗟歎  
あゝ又義秀さるち對ひ阿三との何とせられ。稲向大人の怨言のみる実情の  
随ふとわんがを憎ゝそわんがの今ゆりその甲斐まけども吾侪が小松であひ  
とね要時もあるゝ立よ。と先を妻子小松をせよ去歳より今茲のあやむ  
鳩の翼は二毫の音つれもろ過され。と友達のよれ人へとも妻子のいと強  
面うべや況け亦嬰兒を矢藤五奴に捉られ折渠が所望の金をとて賺と  
小見をさる復ゝ後小松とも還たわんがの早と子を喪れ又矢藤五を  
軽蔑せ。これね謀の勇み似る定め意味のあるの歎。と思ふ我  
儂が曾あわねとさる田鶴との殤子。闇より闇より入さる友鶴との  
ふゝ思ふわんがの好む男見まれ女の子まれ又生れもせんを女見ひる孫  
ひるのこれ彼共先ゝ稲向大人の心の哀を世は傳ふるべからぬわんがの  
る人へも又あるべし。七七四十九日の魂魄天に飯るといへと友鶴との魂魄



平泉の柵ありと巷談既定るを某ありて今岩神より立ちて夏  
陸奥の赴く轍魚の危窮を拯ひて義を以てせざる勇士ありと云ひ  
けし夜を日と経て先陸奥に馳せり冠者夫婦を救ひて経任を討捕り然  
けれども功は誇らむ大將多田藏人が鎌倉へおとまりんとて只管誘薦をも袖  
振拂ひ彼処を退けり地を投ぐ急ぐ程に箇様くあるより越後の津川の旅  
宿あり極毒瘡の瘻より病煩ふと十餘日おひの外日を過し病ややく  
愈しふべきを彼処を立ちて亦復た路を兩を犯し宿りを約せしむる  
る宿の檐下の松のうねと待とせし吾妹子も姑もせまるに法の名を尋  
る昔語とありる皆言天命なるをそれとせしむるよりその容色をよも  
見ぬる畜人残賊の礫お打れ命を隕せしを満命を哀さるやと義秀が  
不幸のと救ふよりもそれのたとひのふと問れん彼矢藤五郎経任の四天王  
と云れる驍勇の賊將へ先見遠謀のありて経任を秘藏せし幻術の書を竊りて  
を逐電せしと云ふ一扇の翼を添ふ術あり縦彼奴が望み任と許すの金を  
取らざるも賊情に信義を疎し撃殺される等類の死にても復さるる金を  
奪て小児を屠る術をて逃去るこれ盗糧を齎し雙刀を與ふ世の胡  
慮と云ふと云ふやと云ふも田鶴媛が命運の竭る所亦のふと云ふと云ふ今を  
矢藤五郎術をりて輒く脱れ去りたりとも某が世に在る限り往方を索し撃殺す  
國家の毒を殺さる女児なる小怨を報へん今各位の悔吝送恨人情のあは  
れ衆人のある義秀へ因愛より信義を以て車と云ふ故に造次轉沛みる公  
道お申さるるやと云ふ忠義の拘と云ふとも恩愛の奴と云ふと云ふより婚姻を推  
辞しよと云ふ故に強られより今更に憂目をも然と受りてを是非とせられ  
る打も殴もあはひに聊も厭ひのほどと辭さるるやと云ふ論世判五三やうやくと云ふ

望け怨とけてひとく感嘆あつた中ある判五六慚愧堪ざりて観推拍と朝夷  
ぬよ許し我儂不才の俗人なれば賢良交遊のをあらむ恨みありて懐きあはれ  
るをとりよる思思痴の諄言ふもさうける時を頼りて田鶴媛亡骸をとり歟ん  
ともせりいへ櫃を抱きて珠を送れ被りも似たりけり前裁る乾浄房へ和君  
あもあられするまの持仏堂之本尊へ恵み作佛先祖昭穆の美位へさす妻  
及友鶴木が新位牌も建ててみる彼処より朝夕の香華燈明一日の間ぬる在る  
まの選佛場を命終りて田鶴媛へ定業をたかめこのまゝ二三側より百田の大人  
寔に然る鶏卵も等しき嬰兒のあやうりのまの擲れれば存命死なねども後世ぞ  
憑りかんとてあやういふまのまの判五も義秀も身を起こさるる後世の同  
うち嘆て隔亮をあらむまのまのありての人の誰と其の次の巻は解分るをえん知ん

朝夷巡嶋記全傳第六編卷之二終

村田

石の朝朝

石

朝朝

の

